

週刊ミニクニヤーマは、  
原発のキノの毒電気で  
電子本を作りたい。

まえがき

この本の著者は、今村明恒<sup>あきつね</sup>・寺田寅彦<sup>たけひこ</sup>先生ご指導のもとに、多年、日本地震史の研究に従事してきた。この本に書いてあることは、地震史研究の副産物ともいふべきものである。すなわち、昔の地震の記録にありおり見い出される記事から暗示を得て、地震と深い関係がありそうに見えて、しかも今まで学者が手をつけなかった特殊の自然現象について、少しばかり調べてみた結果が通俗的に記されてある。

この本に書いてある自然現象は、いずれも見かけ上奇怪きわまるもので、したがって正統派の地震学者からは、あるいは毛ぎらいされ、あるいはあまり関心をもたれない性質のものである。しかし、

ある人が言ったように、「自然現象は自然の言葉である。自然の言葉でわれわれの研究に価しないものは一つもない」はずである。

著者がこれらの現象を研究対象として取り上げたのは、決して物好きからではない。またある人によって非難されたように一時の思いつきからでもない。いまだ解読されない自然の言葉のほんの一部でもあきらかにしたいという念願からであったことを、公言してはばからない。

しかし、著者は前に記したごとく地震史の一研究者であって、物理学者でも生物学者でもない。したがって著者の調査研究がはなはだ不完全・不徹底であることは、著者自身もつともよく認めている。

要するに、著者は荒地を開墾して種子をまいたところである。そ

の種子は、将来すぐれた科学者によって育成されるならば、かならず立派な実を結ぶであろう。

「地震雑筆」の中に収めた五篇の随筆は、「今村明恒先生素描」をのぞき、一度雑誌に発表したものであるが、この本に収めるにあたって全部書き改めた。記事の重複をさけるため、またある場合には紙数に制限されて思うように書けなかったためである。

この本をまとめるにあたって、著者はできるかぎり平易に、またできるかぎり肩のこらぬようにと心がけたが、はたしてその意図がどれほど実現されたか、心もとなく思うのである。

昭和三十一年（一九五六）八月

暑さと病気になやみながら

# 地震ナマズ（一）

著者

## 第一部——地震ナマズ

### 一 地震の予言者……ナマズ

地震虫から地震ナマズの誕生まで

昔の人は、地下に住んでいる大ナマズが体を動かすと地震がおこると考えていた。安政二年（一八五五）の江戸大地震のあとに出版された錦画にはナマズの画がたくさん描いてある。「昔の人」と言ったが、地震をナマズのしわざと考えるようになったのは、昔は昔でも大昔ではなさそうである。

静岡県賀茂郡松崎のある寺で唐紙からかみを張りかえたとき、下張したばりに使わ

れていた古い暦が発見された。この暦は建久年間（西暦一一九〇～一一九八）のものだったが、それに「地震の虫」という奇怪な動物が印刷されてあるという。わたしはこの画を見たことはない。しかしジョン・ミルンの書いた本に、「大きな地中に住むクモ、すなわち地震虫」と記してあるところから推測すると、たぶん江戸時代の書物にのっている、<sup>えたい</sup>得体の知れぬ怪物が日本全国を<sup>せお</sup>背負っている画と同じものである。これによると鎌倉時代には地震をナマズのしわざと考えていなかったことがわかる。

<sup>かしま</sup>茨城県鹿島神社の境内に<sup>かなめいし</sup>要石という石がある。地上には丸っこい頭だけが出ているが、全部掘り出したら、たぶん石器時代の石棒に似た形のものではないかと想像される。『常陸国誌』には「伝説によると、大きな魚が日本を取り巻き、頭と尾が鹿島の地がかさなり

あう。その頭と尾を鹿島明神が釘で刺しつらぬいて、魚が動かぬようにしている。要石はすなわちその釘だ」という意味のことが書いてある。この本には「大魚」とあってナマズとは書いてない。

右の要石の伝説は、アイヌの神話によく似ている。地下に大きな魚がいて、その魚が多量の水をはきだすと津波がおこるといふ。地震と津波の違いはあるが、魚のしわざとする点でよく似ている。

元禄三年（西暦一六九〇）に日本にきて、同五年に帰国したドイツ人ケムプヘル（ケンペル）は、『日本記事』（『日本誌』か）という著書の中に、「日本には地震が非常に多い。日本人の地震をおそれることは、ちょうどヨーロッパ人が雷をおそれるのに似ている。地震は大きなクジラが地下を這い歩くためにおこるのだと、日本人は言っている」と書いてある。たぶんケンプヘルは、地震をおこす怪物はこれだと

言つて示された大ナマズの画を見て、てつきりクジラだと思つたのである。体は大きいし色は真まつ黒くろだからクジラと思つたのも無理はない。もし、わたしの想像があたつているとすれば、元禄ごろにすでに地震ナマズの俗説がおこなわれていたことが推測される。

地震研究所の二代目の所長であつた石本巳四雄博士が、もっと年代の古いものを発見された。それは意外にも芭蕉の俳諧だったのである。つぎに石本博士の「地震と芭蕉」という文の一節をかかげる。

「古来地震に關した歌、俳句類のきわめて少ないことは不審たに堪えぬことであるが、俳聖芭蕉も同じく地震には縁遠い方といわなければならぬ。ただし、芭蕉も寛文二年（一六六二）五月朔日の近江大地震には、伊賀の上野で遭あつてゐるはずであり、年表によ

底本：『地震なまズ』明石書店

1995（平成7）年12月20日 第1刷発行

入力：しだひろし

校正：..

×××年×月×日作成

青空文庫作成ファイル：..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://>

[www.aozora.gr.jp/](http://www.aozora.gr.jp/)) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボラン

ティアの皆さんです。

\*次週予告

第六巻 第一号

地震ナマズ(二) 武者金吉

第六巻 第一号は、

二〇一三年一〇月二八日(土) 発行予定です。

定価：100円(税込)

PDFマガジン 週刊ミルクティー\*第六巻 第一〇号  
地震ナマズ(二) 武者金吉

発行：二〇一三年九月二八日(土)

編集：しだひろし / PoorBook G3'99

<http://www33.atwiki.jp/asterisk99/>

出版：\*99 卅版

〒994-0024 山形県天童市鎌田二丁目

アパートメント山口A-11011

販売：DL-MARKET

◇巻末イラスト：石川千代松。



PDFマガジン 週刊ミルクティー\*

\*99 <http://www33.atwiki.jp/asterisk99/>

月末週号：無料